

住文化の持続と変容

—— 計画の立場からの日本住居現代史 ——

鈴木 成文（神戸芸術工科大学 教授）

1. まえがき

「日本の住文化の近代化の足跡を住宅計画の立場から論ぜよ」というのが、私に与えられた課題である。これはなかなかの難問である。

「近代化の足跡」を語るのは、言うまでもなく歴史の領域である。日本の近代化とは主に明治以降の歴史であり、近代住居史は多くの研究者によって手がけられた。現にこの住宅建築研究所（住宅総合研究財団の前身一編者注）の委託論文でも、1986年度に平井聖・青木正夫の両氏が力作を書いている。一方、「住宅計画の立場から」という注文がなかなか厄介である。これは現代から将来へ向けての予測・展望の問題となる。先の論文では、青木氏は計画の研究者であるが専ら歴史の叙述に徹し、軽々に展望を出すことは控えているように見え、一方平井氏は茶の間の復権を提唱しているが、これは日本社会の動きにおける予測・展望というよりは、自らの生活体験から発する信条としての提唱のように見受けられた。

さて、計画の立場から歴史（足跡）を語るには、現代における問題点を過去に辿り、その由来・起源を探るのがよい。今日の問題意識から過去をとらえる。歴史は現代から遡るべきだと青木正夫が述べており、計画学の分野では既にそれが認められている。

たまたま私の属するハウジングスタディグループでは、住宅建築研究所の助成を得て、「体験記述による日本住居現代史」の共同研究を実施しており、その梗概はこの研究年報の同じ号に掲載されている。この共同研究を基礎にしつつ、私の解釈で住文化の近代化の足跡を語ろうと思う。この論文と研究報告は、いわば姉妹編である。

近代化というと一般に明治以降の変化を指すであろうが、私がここで扱うのは、計画の立場からという趣旨に従って、現代史である。とくに第二次大戦前後から今日までの、約半世紀の歴史である。日本の住居の変容はこの期間に甚だ大きかった。そしてその変容はいまなお継続している。今後の姿を展望するためには、この近い過去の歴史こそ最も必要であろう。

現代史の叙述のむつかしさは、自分自身がその中に身をおくために、離れて眺めることの出来ないことである。

鳥瞰がきかない。流れの中に居ながらその流れを客観的に叙述することが要求される。当然、自分の体験に強く支配されることになろう。これは避けられない。しかし幸いにも、ハウジングスタディグループには、同じ関心をもつ住居研究者が十数人もいる。それぞれ違った体験、違った住居観をもつであろう。これらを互いに出しあい、異なる角度から論じあうことによって、多少とも個人の偏りからは逃れた住居史が語れるのではなかろうかとの期待がある。

現実への埋没から逃れるもう一つの方法は、比較文化論的な手法の助けを借りることである。例えば、都市住居の歴史を見ようとするとき農村住居との比較で見る、日本の住居史を見ようとするときヨーロッパや中国や韓国との比較で見る、といった手法である。これもハウジングスタディグループがとっている研究方法である。とくにこのグループには、住戸から集合まで、また都市住居から農村・漁村住居まで、さまざまな領域の研究者を含むことが強みである。さらに近年における韓国研究者との共同による日韓住居比較研究なども、この日本住居現代史の叙述に大いにプラスすることと信ずる。

なお、この論文の基礎となった「体験記述による日本住居現代史」の共同研究者・研究協力者名は、文末に記した。

2. 変容の見方

さて、戦前から現代まで、住居はどのような経緯を辿って変化して来たか、それがこの小文の主題である。

その変容には、必ず何らかの力が働いたに違いない。私はこれを次のように見る。

変化の要因には、まず、時代の状況がある。すなわち、家族形態の変化、都市化、建設事情の変化、生活様式の洋風化、経済成長による物の豊富化、情報の発達などの状況が、否応なしに住居の形を変え生活を変えて行く。

これに対し、変化を意識的に進めようとする人為的な行為がある。これを計画の力と見る。公共住宅における計画はその代表的なものであるが、建築家による個人住宅の設計も、それが住居の近代化について意識的に行われる場合には、新しい住居のモデルを示すという意味で、

これも計画的行為と見てよからう。その他、近年の民間分譲住宅やプレファブ住宅などの中にも、時に意欲的な計画の見られるものがある。

一方、こういった変化を嫌い、現在の姿のままを維持させようとする力がある。生活や住居がしっかりした型として成立・定着している場合は、その力が強い。文化の力と言ってもよからう。

歴史の変遷の中であって、文化としての底流が存在し、これに対し社会の状況が作用してこれを勝手な方向に押し流そうとする。一方、計画的行為が意識的に作用を加えて望ましい方向に引っ張ろうとする。こういった力関係の中で住居はゆれ動いていく、と見るのである。このような変容の構造をどこまで明るみに出せるか、それがこの小論に課された命題である。

3. 現代住居の典型とその問題点

住文化の変容の足跡を辿るにあたり、計画学の定石に従って、まず現代住居の姿とその問題点を述べることからとりかかりたい。

ところで、現代のきわめて多様化した住居状況の中にあって、どれを現代住居の典型と見るかが問題となる。それは当然のことながら、歴史の大きな流れに乗ったものの、すなわち、特種例でなく広く分布する一般例でなければならない。しかし、必ずしも数の上での最大多数ということは意味しない。むしろ、流れの本流の先端に位置するものであることが必要である。日本の住居史の流れがただ一筋であるなら、その先端も見出し易からう。もし流れが幾筋かに分かれているとき、どの流れを本流と見るかが問題となる。その場合は、流れの方向づけに対して影響力の強いものをとることにしたい。

このような考察から、私は現代住居の典型として、首都圏における戸建住宅に最もしばしば見られる平面形を選ぶことにした。我々の体験記述の中にも、数例が存在する。

〔図1〕(事例R)はその中の一例である。このプランとその生活の特徴を列挙すれば、次のようになる。

- ① 1階が食事・だんらん・接客など家族共通の生活部分に充てられ、2階が個室となる。個室は家族構成員の各人に割りふられる。空間の公私分化が明瞭である。
- ② 食事は、ダイニングキッチン(DK)か、またはリビングルームの一隅に食事の場をもつ(LD)という形式が多い。
- ③ 洋風の居間すなわちリビングルーム(L)をもつ。DKとL、この二つの空間が家族生活の中心となる。
- ④ 和室を少なくとも1室もつ。これは床の間付きの

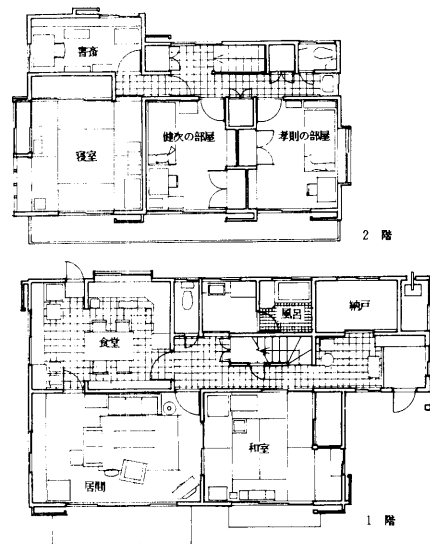


図1 現代住宅の典型例〔事例R〕 1975年
川崎市麻生区、工務店による戸建注文住宅。1階にL・DK・和室、2階に3個室(和1洋2)・主人用書斎をもつ。

整ったもので、おおむね玄関の近くに位置し、居間(リビングルーム)と開放的につながる場合が多い。ここは接客の場となると同時に、夫婦の寝室として使われる例も少なくない。

洋風(イスザ)と和風(ユカザ)の生活を併用するというのが、現代住生活の特徴となっている。

- ⑤ 主要室は南面し、水まわり等サービス部分が北側に位置する。
- ⑥ 廊下によって各室が結ばれ、それぞれの部屋は動線的に独立性がある。

〔図1〕(事例R)は小田急沿線の住宅地に1975(昭和50)年建設の、工務店の手になる注文住宅であるが、同種のプランは首都圏において注文住宅・建売住宅あるいはプレファブ住宅を問わず広く見られる。またこれは、住宅産業の側において定型化されたプランであると同時に、需要者側のイメージの上でも既に定着したものであると思われる。

この型も、後述するように、細部では若干の違いの見られる例は多い。とくに、ダイニングキッチン(DK)かリビングダイニング(LD)かあるいはL・D・Kがそれぞれ独立かといった差異があり、また和室がリビングルームに開放的につながるか分離されるかといった差異もある。さらに首都圏を離れた地方都市では、より大きな差異が見られる。すなわち和室が続き間座敷の形式をもつものが多く、さらに居間も洋室ではなく和室の茶の間となる例が少なくない。しかし大筋のプラン構成はほぼ同様であるといっていよい。

さて、ここでの課題は、戦前の住居の型からいかにしてここに至ったかという変容の軌跡を明らかにすることであった。戦前の型については次節で述べるが、考察の

ためには、現代住居が戦前とは明瞭に異なる点は何か、また、明らかに戦前の型を引き継ぐ点は何かにまず注目し、そこにおける問題点を指摘する必要がある。それはおおむね以下の諸点である。

- (1) 公私の生活の空間分化の意味。その結果もたらされた生活上の利害。
- (2) DK がなぜ普及したか。その住様式上の意味。またイスザの食事の利害。
- (3) 洋風リビングルームの由来。その住様式上の性格。その今後。
- (4) 和室あるいは座敷の存続の意味。
- (5) これらの全体を通じて見た現代住居の性格と、今後の行方。

これらの課題を念頭に置きつつ、この半世紀の都市住居の歩みを辿ってみることにする。

4. 戦前の中廊下型住宅

一方、現代に至る前の姿としてどの型を設定するかが問題になる。これは、戦後の変容を受ける以前のものでなければならない。すなわち、第二次大戦以前にはどこにも見られた一般住宅の中から選びたい。

戦前の日本では、人口の上では農村が主体であり、住居も農村住居が主であった。しかし今ここで問題とするのは、今日の都市住居の生い立ちであるから、より直接的な関連を見るためには、戦前においても都市の住居をとり上げるのがよい。

一口に都市住居と言っても、階層により地域により著しく異なる。より伝統的のもの残存としては町屋があり、近代以降の変容を経て商店併用住宅が今日でも広く分布している。ただしこれらは、高度成長期を経て、商業経済機構の変動と共に次第に衰退の道を辿っている。一方、専用住宅の系列としては、武士住宅の流れから変化した中流住宅があり、戦前におけるその代表的な型は言うまでもなく中廊下型である。また、より下層の住居としてはいわゆる裏長屋が存在した。

今ここで現代の戸建持家住宅に至る道筋を辿ろうとするためには、これに最も深く関わりをもつものとして、都市中流住宅「中廊下型」をとり上げるのがよからう。これが一つの「型」を形成していたことも、その後の変容とくに型の崩壊と新たな型の生成の胎動を考察する上にふさわしい対象だと考えられるからに他ならない。

中廊下型住宅については、古くは木村徳国の論文があり、またその形成の過程の解明については、近年における平井聖・青木正夫の所論がある。これらを通して、「中廊下型」住宅の典型としては〔図3〕をあげることが出来る。そしてこれは、それ以前のタイプすなわち江戸期の武士住宅の流れを汲んで明治期に定型化した〔図2〕

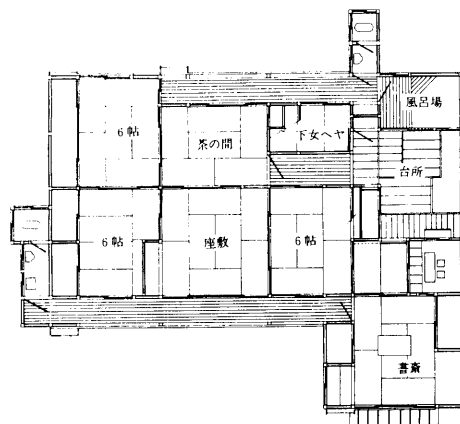


図2 続き間型の一例 明治中期 夏目漱石の住まい
南の続き間座敷・書斎がオモテを、北・西の茶の間その他がウチを構成する。中廊下をもたず、部屋が連続する。

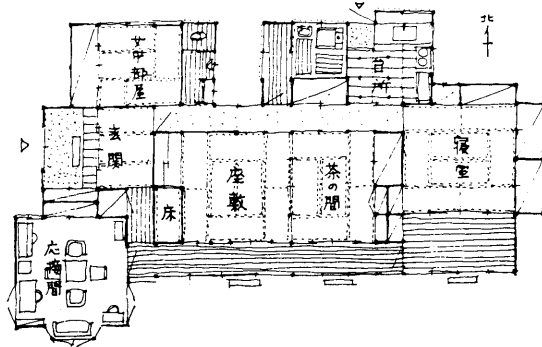


図3 中廊下型——近代住宅の代表的平面(平井聖による)
1928年 現東京都大田区洗足
南に続き間座敷、玄関脇に洋風応接間、中廊下の北に台所・風呂場・便所・女中部屋をもつ。続き間は玄関に近い方に座敷、奥に次の間という配置で、この次の間が茶の間となる。

のようなタイプ（これを仮に「続き間型」と呼ぶことにする）とは、明らかに異なる特徴を備えているのである。

続き間型は畳の間の連続で部屋が構成され、接客を主体にしたオモテ（表）が庭に面し、家族の日常生活の場であるウチ（内）がその裏側にあるという構成であった。

〔図2〕に示したのは明治の文豪夏目漱石の家で、現に犬山の明治村に保存され親しく接することが出来るが、これが小説「我輩は猫である」の舞台になっているため、その各室の使い方や生活の様相はかなり克明に再現できる。

〔図3〕の中廊下型住宅の特徴は次のように整理できる。

- ① 中廊下を設けてオモテとウチを明確に分離し、各部屋が動線的に独立している。
- ② 床の間付きの座敷と次の間の「続き間座敷」を、南側の主要な位置にもつ。
- ③ 台所・風呂場・女中部屋などのサービス部分は、おおむね中廊下の北側に位置する。

以上が中廊下型全般に共通する特徴であるが、次に、

この型の発達変遷の過程の中での重要な性格について述べる。

- ④ 食事の場である「茶の間」は、変遷の初期には、続き間型の流れを汲んで北側に位置したが、次第にこれが南側に進出し、続き間座敷の次の間を使うようになる。
- ⑤ 座敷と次の間の配列は、初期にはこれも続き間型の伝統から、奥に座敷、玄関に近い方に次の間が位置したが、次第にこれが逆転する。
そしてこの④と⑤の変化はほぼ同時に進行すると、平井は分析している。また、この変容の系譜は

青木の研究に詳しい。

- ⑥ しばしば洋風の「応接間」をもち、これはおおむね玄関の脇に位置する。
- ⑦ 表玄関（客および主人用）と内玄関（家族用）の二つの玄関をもち、さらに女中や御用聞きなどの出入りする勝手口がある。
- ⑧ 2階が設けられる場合は、そこはおおむね格の高い続き間座敷となる。

先の〔図3〕の中廊下型住宅は、この④、⑤の二つの変容を経た後の姿であり、これが近代日本住宅の典型であろうと、平井は述べている。この例は⑦、⑧のみを欠

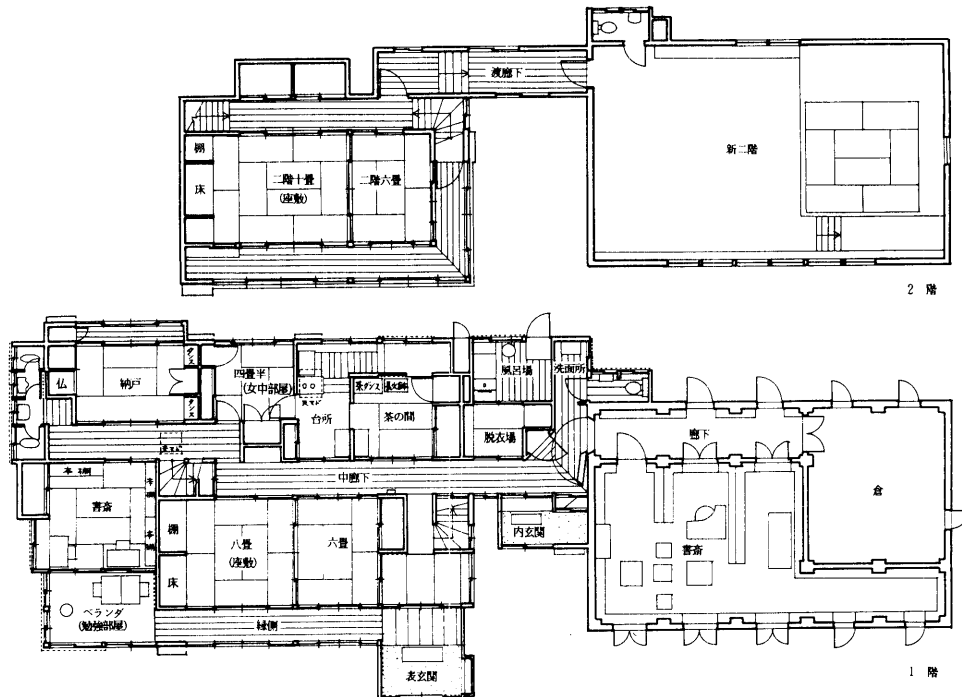


図4 中廊下型〔事例A〕1921年（1927年増築）

東京府北豊島郡（現豊島区）。南に続き間座敷と玄関、北に茶の間・台所・女中部屋・納戸等をもち、中廊下で区分される。2階は格の高い続き間座敷、内玄関・風呂場・書斎（RC）は1927年の増築。

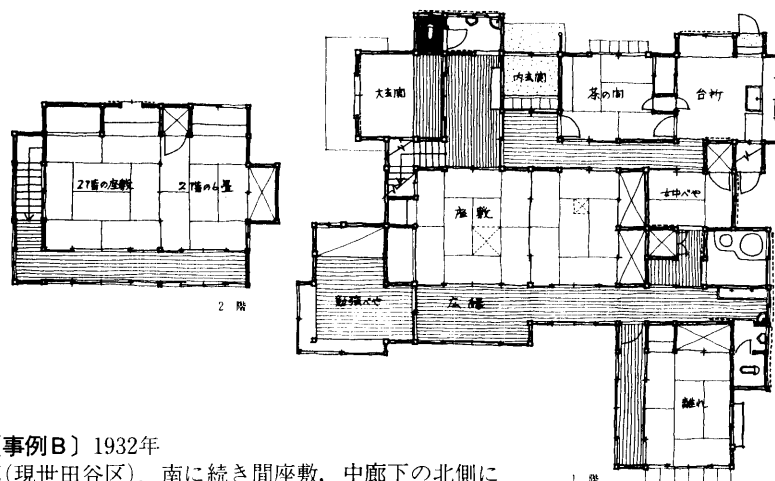


図5 中廊下型〔事例B〕1932年

東京府荏原郡（現世田谷区）。南に続き間座敷、中廊下の北側に茶の間がある。座敷の掘りごたつ・広縁が特徴的である。

いている。

我々の「体験記述による日本住居現代史」研究においても、中廊下型住宅が何例かあったので、このうちの2例を紹介しよう。いずれも④、⑤の変容に関わる事例として興味がある。

〔図4〕(事例A)は、茶の間が中廊下の北に位置し、また続き間座敷の配列は座敷が奥にあり、両者とも古い型に属する。ただし体験記述によると、以前には北側の茶の間で行われていた食事が1930年代後半からは南側の次の間で行われるようになり、さらに、1940年にはこの次の間に大きな掘りごたつが設けられるなど、生活面の変化がうかがわれる。また、1920年代にはその家の主人と客しかほとんど立ち入らなかった座敷が、代が替わった30年代には子供が相撲をとったりするように変化した様子も、記述されている。なお、この事例の書斎である洋間は鉄筋コンクリート造で1920年代末に増築されたもので、従って位置的には典型的な応接間とはやや異なる。

〔図5〕(事例B)は、やはり茶の間が北にある点では古い型だが、続き間座敷の配列は座敷が玄関に近い方にあり、新しい型となっている。さらにこの例では、この家の主婦がかなり合理的な思考の持ち主であったために、大工棟梁の作った原案に種々変更を加えて直しているが、特徴的な点は、座敷と次の間に掘りごたつを設け、ここを家族だんらんの場として作っていることである。縁側も座敷の前のみ広縁として、この居間の形成を助けている。この他、大工の原案にはあった洋風応接間をやめて代わりに子供の勉強室を作ったり、さらに2階の座敷と次の間は位置を逆転させて、次の間を個室として使えるようにしたなど、いろいろな工夫が盛り込まれている。間取りの進化は、こうした使い方の変化や建てるときの創意工夫などを通じて、徐々に進行していったものと思われる。

5. 戦中期の状況と計画

第二次大戦以降における住居の変容を考察しようとするとき、忘れてならないのは、大戦末期から戦後しばらくの間の住宅建設の途絶という事態である。およそ1940年から50年の10年間、本格的な住宅は建たなかった。民間の貸家も個人住宅も建設されなかったのである。逆に、空襲に備えての建物疎開ということで既存住宅の引き倒しまで行われ、ちょうど学生だった我々はその作業に駆り出された経験もある。そして当時建設されたのは、戦時国策に沿った軍需工場の社宅としての営団住宅などである。いわば計画的住宅であった。

日本住宅営団には当時、市浦健、森田茂介らが居たが、とくにその計画理論に重要な働きをしたのは西山卯三であった。彼は豊富な小住宅実態調査を背景に、食寝分離

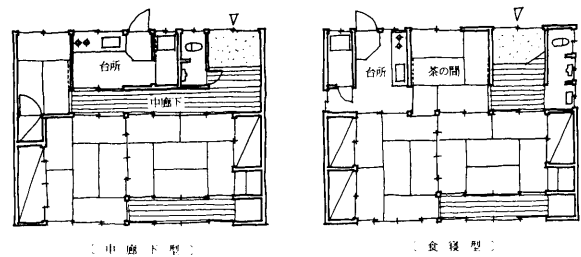


図6 営団住宅における食寝型の提案 1940年代前半

左：中廊下型

右：食寝型（茶の間を設け、ここを通路として用いる。）

を基本理念とした平面構成を提案し、これが営団の規格住宅の骨子となったことはよく知られている。この型を西山は「食寝型」と称している（図6）。

この型は具体的には、2畳・3畳あるいは4畳半程度の小室ながら食事室（茶の間）を設けることを基本としているが、同時に、小住宅にまで普及して来っていた中廊下型に対して、廊下を廃し、この茶の間を動線を中心とすることによって、面積の増加なしに食・寝の分離を実現しようとの意図をもったものと言える。生活上の提案を含みながら計画上の合理性を求めたものと言ってもよい。

このことは、住様式の歴史的な流れから見れば、中廊下型の求めた「各室の動線の独立性」の要求に対して、明らかに対立する方向であろう。むしろそれ以前の続き間型的な空間構成に基づく慣習へと逆戻りしつつ、ホール的な茶の間を獲得しようとしたものと考えられる。

この両者の対立葛藤、つまり、時代の流れとしての中廊下による室の分離独立要求と、一方、計画の力による茶の間確保とそれによる動線処理の対立が、どういう結末を見せるかは、住居史研究の上では興味あるテーマであるが、戦争の進展という社会状況は、「食寝型」（茶の間ホール型）の住居を十分建設するには至らずに立ち消えさせてしまった。そして、より小規模な〔6・4〕あるいは〔6・3〕といった極小規模の住居の建設へと向かったのである。

この対立は、戦後の公共住宅において、DKの導入をめぐる対立のときまで引き延ばされることになった。

6. 戦後初期の極小住宅

〔応急住宅・初期木造公営住宅〕

敗戦後の数年間、1945年から50年代の初めにかけては、都市住居についてはどん底の時期であった。民間一般住宅の建設は、戦中期から引き続き途絶えていた。建てられたのは、公共の手になる簡易住宅・応急住宅、小規模の官舎（公務員住宅）、あるいは会社社宅の類である。これらは、2室（6畳・4畳半、または6・3）あるいは3

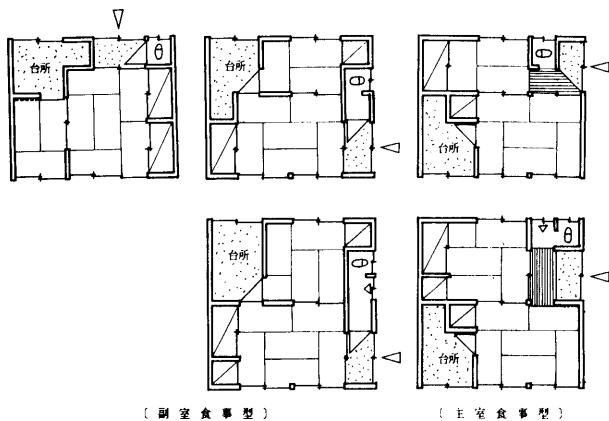


図7 大戦末期・戦後初期の応急住宅 1940年代
7.5坪, 9坪程度の極小住宅。2戸建または4戸建。
左：副室食事型 右：主室食事型

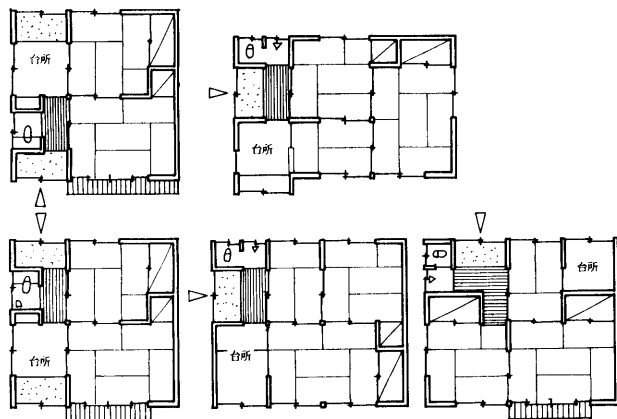


図8 初期木造公営住宅 1950年代前半
東京都営住宅。9, 10, 10.5坪。

室（6・4・3程度）の、ごく貧弱なものである。そしてこれらは、戦前までの都市住宅の流れとして定型化されていた中廊下型などとは、全く別の世界での計画・設計・建設であった。いわば、最小限住宅の合理化の試みであったと言ってよい。

流れの途絶と新たな合理化指向、これが当時の住居の変容に大きく作用したことは疑いない。

尤も、合理化といっても確固とした計画理論が登場するのはもっと後である。戦後初期には資財の乏しい中で何とかせめて2室ないし3室を確保しようという、追いつめられた中での合理化であったと思われる〔図7〕〔図8〕。

この応急住宅、その後の初期公営住宅など極小住宅の意味するものを考えてみることは興味深い。それは、住様式の伝統や慣習、すなわちオモテとウチ、接客形式や空間の格式などという文化の流れを断ち切って、日常の生活要求のみに従って部屋の使い方が決められていたのではあるまいか。そして、戦後にわかに盛んになった住居研究・住み方調査によって、その生活要求が追求され

ていく。わずか2室の住宅にせよ、その間取りの構成によって住み方が規制されるという原理が明らかにされ、〔副室食事型〕と〔主室食事型〕では異なった生活現象が見られること、前者は食事室が固定されて食寝分離は実現され易いが、寝室の分解はむしろ後者の方が実現され易いことなどが認識される。また、住居の狭さから来る矛盾を逃れるために、台所を改造したりしてそこで食事するという生活現象が見られることなども報告され、新しい間取りの構成の計画への糸口となるのである。

〔戦後期の社宅〕

極小の公営住宅よりややましだとは言え、やはり最小限住居といえる会社社宅の例が、我々の体験記述の中に現れる〔図9〕（事例C）。

6・4・4の3室構成だが、6畳の茶の間を中心に置き、右に両親の部屋、左に子供の部屋のそれぞれ4畳半を配して、続き間として構成され、北側に台所・便所・玄関などが位置する。全室畳敷きであること、壁の少ない開放的な続き間であること、そして住居規模の割には広い玄関などに、伝統的な日本住宅の流れが感じられると同時に、全室が南面すること、茶の間（食事室）をホールの的にして個室を左右に分離したこと、廊下を廃してコン

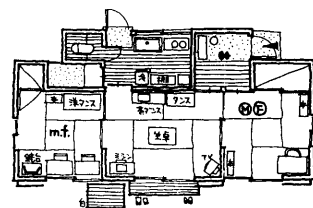


図9 戦後初期の民間社宅〔事例C〕1948年頃

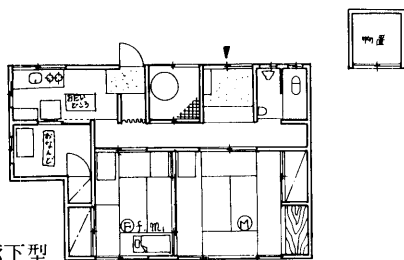
パクトな間取りとしたことなどに、一種の合理化・近代化への指向を感じとることが出来る。日常性を重視した「茶の間中心型」の平面構成と見られ、その中に展開される生活も素直にその構成意図に従っているさまが、体験記述から読み取れる。

〔戦後期の官舎〕

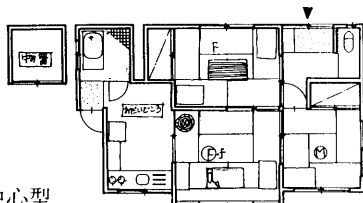
体験記述の中に、父親が官庁づとめのため各地の官舎を転々とした事例がある。記録そのものは既に高度成長期の1960年代の生活であるが、その建設時期は50年代であらう。

官舎（公務員住宅）は大蔵省の管理下にあるが、直接的には各地の財務局が管轄する。その計画もおそらく地方財務局によるものであろう。しかし間取りはその地方の一般住宅とは別の世界に属し、むしろ中央で作られたその時代の住居観に支配されていると見てよい。ただし各地の設計は、少しずつ傾向の違いを示していて興味がある。

D① 長野市 中廊下型



D② 函館市 茶の間中心型



D③ 佐久市 近代化指向型

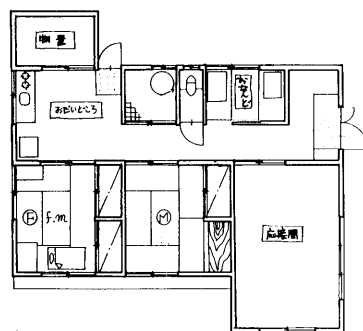


図10 木造官舎〔事例D①、D②、D③〕1960年頃

〔図10①〕(事例D①—長野市)は、南面する8畳(床の間付き)と6畳の続き間をもち、かつ北側に台所・浴室・便所・玄関をもつ「中廊下型」で、小住宅ながら部屋の独立性を確保した、戦前からの流れの上に位置する間取りと見られる。

〔図10②〕(事例D②—函館市)は廊下がなく6・6・4がコンパクトに結合するプランで、いわば続き間型だが、押入れのない南6畳は茶の間(居間)として意図されているように見え、南面する台所と共に、戦後の合理化の考え方の洗礼を受けた「茶の間中心型」の間取りと考えられる。

〔図10③〕(事例D③—佐久市)は、かなり大きな洋間(応接間)をもち、南面する6畳の2室も続き間でなくそれぞれ独立室となっている。台所も大きくしかも廊下に対してオープンで、DKを意図したものであろう。とすれば、西側6畳は居間的な使い方が意図されたものと思われ、中央の6畳(床の間付きの座敷)は客間であろう。当時の一般住宅とはかなり異質の間取りと思われ、おそらくこの地方財務局の担当者の、ある種の近代化意識の産物ではあるまいか。

しかもこれらの住宅の住み方において、体験記述のこの家族は一家の主人の権威が支配し、常に主人が1室を

独占して就寝・接客・書斎の場として使い、主婦と幼い子供二人は他の部屋に就寝していたという。この間取りの設計意図とは異なるかもしれないが、これもある種の日本の典型的な住み方であり、戦後期から高度成長期への移行の頃の矛盾をはらむ様相を示す事例として興味深い。

7. 木造零細アパートの意味

日本住居現代史の上で忘れてならないのは、木造零細アパートの存在であろう。これは前節の戦後期小住宅よりもさらに著しく貧弱な規模の低水準の住居として、1950年代の初めに登場し、しかもその量たるや圧倒的で、高度成長の初期・中期における人口の都市集中の受け皿として機能したのである。

この零細アパートを木賃(もくちん)アパートと称する妙な呼び名が、住宅問題専門家の間でかなり広く使われているが、私はこれを避けている。木造賃貸アパートの略称であるが、一方、社会史・住宅問題史の中で必ず登場するものに、明治期まで存続した木賃宿(きちんやど)がある。乾燥米を携えて旅し、木賃(きちん)すなわち煮炊きの薪の代のみを払う最低の安宿だが、明治期、東京では四谷万年町など各地に存在し、家のない最下層貧民の住まいとして機能していた。現代で言えばドヤである。従って、多少とも教養のある人は木賃(きちん)アパートと誤読するし、学のない若い人は木賃宿(もくちんやど)と誤読しかねない。日本語を乱すものであるから、いやしくも住居研究者は「もくちんアパート」などという言葉は使うべきでない。

零細アパートの住宅問題上での役割については、これまで既に十分論じられているし、多くの学者の研究によってその供給の実態もくわしく明らかにされている。またその住み方の実態についても、ルポ風の記述を含め紹介は数多い。しかし、日本の住様式の変容・近代化の上でどんな役割を演じたかの考察については、残念ながら意外に忘れられているように思われる。

言うまでもなく住宅としての規模は極度に小さい。家族で住まうことを前提としながら初期には4畳半ひと間と押入れのみで、炊事設備は共用であった〔図11①〕(事例E①)。次いでごく小さな流し台の付いた4畳半または6畳〔図11②〕(事例E②)、これが1950年代から60年代に結婚した私自身の友人たちのごく当たり前の新婚生活の場であった。そして注意すべきは、こういう極限とも言える零細住居が、決していわゆる貧困層ばかりの住居でなく、大学出の知識人階層がライフサイクルの上で新婚当初は必ず一度は通過する、ごく普通の住居形態だったことである。

この零細アパートは、日本経済の高度成長と共に漸次

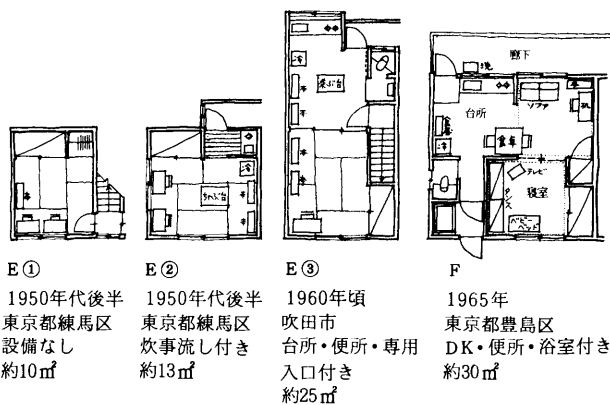


図11 零細アパート [事例E①, E②, E③, F]

レベルアップする。2室に炊事設備付き〔図11③〕(事例E③), やがて2DKに, さらには便所付き, そして浴室付き〔図11④〕(事例F)になる。構造も木造から鉄骨造へ, RC造へと進展し, 同時に居住者層は逆に世帯から単身者へと変化して, 今日では独身サラリーマンやOLや学生の住まいへと転化しているのである。これら各種タイプのアパートが, 体験記述にはまことに具合よく現れている。

さて, これら零細アパートの住様式の上での意味は何だったのか。あるいは単に高度成長期に現れて消えた泡沫だったのか。私はこれを次のように見たい。

(1) 住様式の伝統や慣習の破壊 零細アパートは地方から都会へ集まって来た者の住まいであったから, 血縁や地縁の束縛から逃れた人たちであったに違いない。またこの狭さでは, 伝統や慣習にとらわれること自体, もはや不可能であった。1950, 60年代の時代の空気もまたこれに拍車をかけた。

(2) 合理的な空間利用の助長 慣習の破壊の裏返しになるが, 狭い空間をいかに有効に利用するかということが, 住み手の最大の関心事となり, 多くの工夫が生まれる。机の下に足を突っ込んで寝るなどは当然であり, 仕事机と食卓を兼用する, 時には6畳ひと間に友人十数人を招き, 製図板をテーブルにして盛大なパーティを開くなども, 決して珍しいことではなかった。

(3) 公共住宅の相対的理想化 零細アパートが当た

り前の住居であったから, 相対的に公共住宅は天国と見なされた。アパートの狭さで培われた工夫が, たっぷり広さのある公共住宅で生かされたと言える。

そして今日では単身者用の住まいとして, 若者の雑誌にはインテリアなどの情報が氾濫し, 最も現代風のしゃれた住様式を作り出しているのである。

8. 公共住宅の計画理念と生活実態

この時期に登場するのが, 鉄筋コンクリート造アパートの公営住宅である。これは住居形式の上で新しくただでなく, その計画理論の上でも, 日本の住様式の近代化に明確な意図を以って登場したものである。

公営RCアパートの発足は, 戦後のまことに早い時期である。敗戦の僅か2年後の1947年に, 既に高輪に試作的に建設され, 翌48年には戸山に団地としての建設が始められた。この住戸プランは8畳・6畳・台所という, いわばのんびりした間取りで, 住様式上はとくに新しい考えをもったものとは考えられない〔図12〕。

次いで49年には, ABCの3種類の規模, 階段室を含み各16, 14, 12坪〔図13〕の標準設計が作られ, 全国的に大量建設へのスタートを切る。このプランは, 台所を南面して設けたという点では家事労働の優遇といった戦後の新しい生活観の反映があったろうが, 畳の間の構成に関しては, ただ単に8・6, 6・6, 6・4の2室を襖によってつなげて配置しただけで, 何ら新しい提案を含んだものではなかった。

ここで, 1951年度の標準設計「51C型」の登場となる〔図14〕。この型が, 計画理論の面でも, また住様式の革新の面でも, 住居現代史上に大きな一里塚となったことは認めてよからう。

51C型の提起した計画上の問題は数々あるが, その最も主要なものは次の3点と考えてよからう。これは, その設計の年の春の日本建築学会関東支部研究発表会において, 原案作成者の吉武・郭・鈴木3名の連名で発表しているところにも明瞭に記されている。すなわち,

(1) 二つの寝室の確保。とくにそのうちの1室は明確

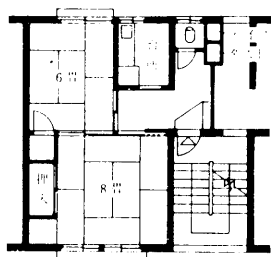


図12 最初の公営アパート
1947年 東京都港区高輪

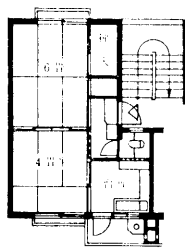


図13 公営住宅 49C型
1949年度 標準設計

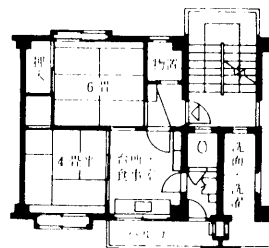


図14 公営住宅 51C型
1951年度 標準設計

に隔離された室とする。

(2) 食事の出来る台所の確保。これは、少なくとも朝食のとれる程度の広さとし、1寝室とつなげる。

(3) 水まわりなどサービス部分の充実。すなわち床に水の流せる場所(洗濯や行水)や物置などを設ける。

私は、今回のこの論文を書くにあたって、あらためて高輪アパートと51C型を見学して来た。そして当時の計画上の考え方が、まぎまぎと間取りにも空間構成にもそして住み方にも表れているのを見て、感慨を新たにした。高輪はいかにも呑気におおらかに作られている。おそらく、生活の具体的な形などよりは、従来の日本住宅の常識を、いかにしてRCアパートの中に入れ込むかだけを考えていたように見える。それに対して51C型はいかにも理詰めなのである。多くの家で台所(板の間のDK)と南の畳の部屋は間の襖がとり外されて一体化し、日常生活は主にそこで展開して、北の部屋は別の空間であるとの扱いが明瞭に見てとれる。生活の形をこのように整えて提案しました、という雰囲気、室内全体から感じられることに、たいへん興味を覚えた次第である。

ここで提起された問題は甚だ大きい。住居というものを、在来からの慣習に流されるのではなく、いやむしろそ

れを意識的に断ち切って、生活を合理的に組み立てるという志向を提案しているのである。そしてこれが、少なくとも公共住宅の計画の間ではほぼ認められて支配的な計画原理となった。同時に、そこで提案された具体的な住様式も、理論と共に受け入れられて、以後の公共住宅の平面形を支配したのである。それは、繰り返すが、①寝室の独立性の確保、②食事の出来る台所の確保、③サービス部分の充実、の3点にほぼ集約される。そしてこれは、公共のみならず一般住宅にも大きく影響を与え、この住様式を全国に普及させることになったのである。

ところでこれら公共住宅における実際の住み方はどうであったか。これはもう、繰り返された多くの住み方調査研究を通じて十二分に明らかにされている〔図17①、

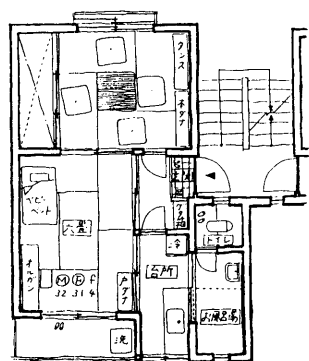


図15 2Kの居住例〔事例G〕1965年
町田市 東京都住宅公社の賃貸住宅

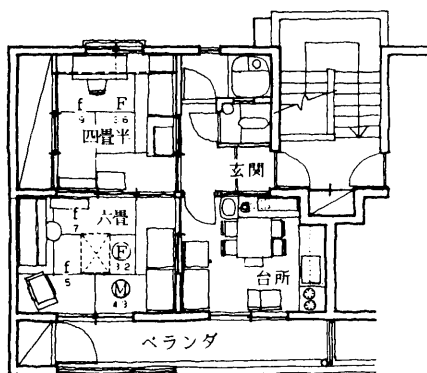
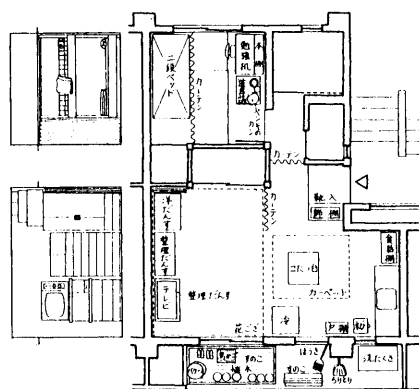
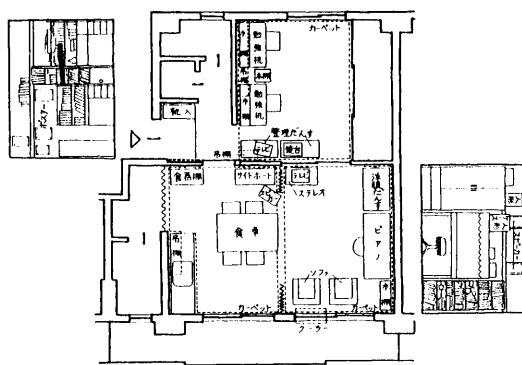


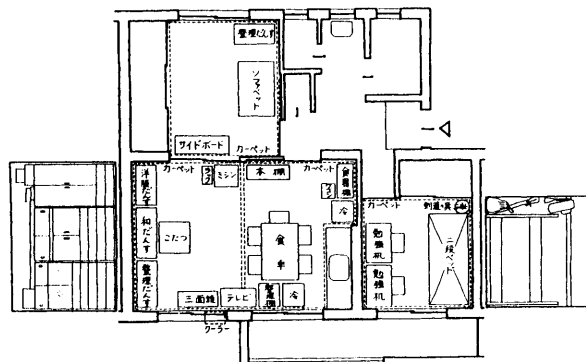
図16 2DKの居住例〔事例H〕1959年
東京都練馬区 住宅公社の賃貸住宅



① 東京都営(第2種)住宅2DK 1974年調査



② 公団住宅 2DK 1973年調査



③ 公団住宅 3DK 1973年調査

図17 住み方調査例

②, ③〕し、体験記述にも何例か現れている〔図15〕（事例G）、〔図16〕（事例H）。住様式・住文化の観点から簡単にまとめて述べれば、次のようになろう。

(1) 台所で食事をする、というDK形式は、またたく間に普及した。ホワイトカラー層の公団住宅ではイスザの食事が普及したが、相変わらず畳の部屋に座ってちゃぶ台で食事する生活様式を好む層も少なくない。1970年代の調査では公団層で約4分の1は存在する。公営住宅層ではユカザの食事の方がむしろ多く、板の間にござあるいはカーペットでちゃぶ台という例も数多い。ただしDK形式は全く違和感なく受け入れられている。

(2) DKとそれにつながる畳の部屋は、開放的につながって使われる例が多い。そしてここが日常生活の中心となる。

(3) 部屋の隔離は、当初は抵抗感も見られたが、やがてむしろ歓迎されるようになった。この壁や押入れで隔てられた独立性ある部屋は、夫婦寝室としてよりも子供の部屋として使われ、夫婦はむしろDKにつながる開放的な部屋に寝る例が多い。これは日本の住様式の特徴的な現象であると思われる。

(4) 夫婦が別室に寝る分離就寝も多い。1960年の公団住宅調査ではこれが約4分の1に上り、とくに子供が幼児期の家族に多い。

(5) 高度成長期の1960年代あたりから家具の増加が著しい。収納系家具と同時にリビング系家具（ソファ・テーブル・飾り棚の類）の増加が著しく、これらは洋風の居間を形成する。3DKのプランでは、DKとその隣の1室をつなげて洋風の居間としてしつらえ、他の2室が寝室となる住み方が多い。

(6) 居間には、ソファセットを応接風に置く例が多い。同時にこたつの普及も著しく、また近年カーペットも普及して、床に座る生活様式も多い。イスザとユカザの混合した様式がむしろ一般である。

(7) 家族のライフステージによって住み方が変わる。とくに子供の成長につれての住要求の変化は著しく、部屋の使い方の変化や移動が見られる。

このようにして公共住宅のプランの型と生活の型はほぼ定着した。

9. 小住宅スタイルブックとモダンリビング

戦後期の住様式変革に、公共住宅とは別の面から一つの力となったのは、小住宅スタイルブックの氾濫とそれによって広められたモダンリビングの考え方であろう。

戦後の猛烈なインフレと貨幣価値の下落は、借家建設を全く不可能にし途絶させた。しかし一方、戦災により膨大な量の都市住宅が失われたのは現実であり、その復興には人々は自力で建てるより方策はなかったのでは

る。戦前の大都市では、専用住宅の7・8割は借家であった。そしてその間取りは、普通の人の普通の常識に沿うように作られるのは当然である。もちろん戦前にも近代的な洋風生活を主体とする住宅は存在したが、それはごく少数の個人住宅、とくに建築家に設計を依頼したいいわゆる邸宅に限られていたと言てよからう。

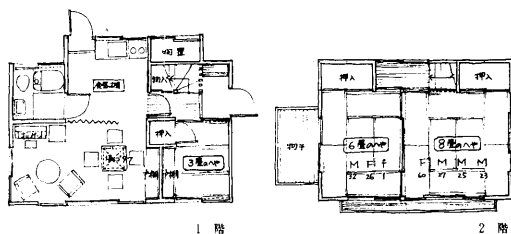
戦後の復興は、僅かばかりの公共住宅や社宅の他は自力建設しか道はなかったのだから、人々の関心がそれへと向かったのも当然である。しかも、個人住宅としては戦前にはまずあり得なかった規模、すなわち10坪とかせいぜい15坪という小住宅が当面の関心の対象であった。そこでどっと小住宅のスタイルブックが町に氾濫したのである。若い建築家は、現実には建つ家を設計する機会はないが紙の上だけで新しい考えを主張し、一方買い手は、現実には家は建てられないがその夢をスタイルブックで追った。

そこに現れたのは、おおむね洋風の食事室ないしは居間を中心としたモダンリビングのスタイルである。ただし当時の貧しさを反映して、寝室は畳敷きの部屋として人数の詰め込みに応えるのが一般であった。家具もまだ市場に十分出回っていたわけではない。パイプや鉄筋を脚にしたテーブルや椅子といった、質素なものが多い。ただ、新しい生活の夢のみが追い求められた。

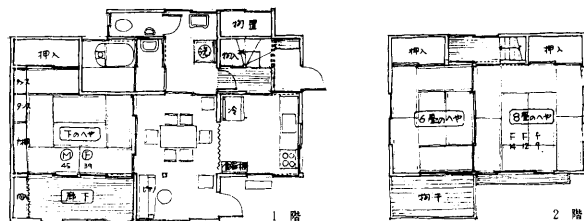
やがて1950年代も後半になると、ようやく産業も回復して力をつけ、都市への人口集中も始まって住宅が建つようになる。そこでスタイルブックで追いつけられた小住宅が現実のものとなる。そしてその設計は、若い建築家の登龍門となった。

体験記述にもこういったモダンリビングの例がある。〔図18①〕（事例I）は1950年の建設で、2階建であるという点では当時としてはやや大きな規模であろう。2階は畳敷きだがいわゆる座敷ではない。また、1階は板の間のリビングルームとオープンな台所で、戦前の普通の住宅とは全く異なるタイプの出現と見てよからう。これは今日著名な建築家K氏の若かりし頃の作であることが判明したが、1950年といえば彼が大学を卒業したばかりである。おそらく設計事務所に勤めながらアルバイトとして設計したものと思われるが、青年建築家の自由な発想が見受けられる。日本住宅の伝統からは離れて欧米への指向が見られるが、当時は海外からの情報が自由に得られたわけではなく、漸く外国雑誌が戦後初めて輸入され始めたという時期である。頭の中でのみ組み立てられた西洋への指向とあってよからう。

こういった傾向は、プランの随所に見られる。1階のリビングルームはその中心であるが、2階の和室にしても畳敷きとはいふものの伝統的の和室からは全く離れて畳を単なる床仕上げとして使っているように見える。最も甚だしいのは便所・浴室で西洋風のバスルームとして作



① 1950年（新築時）1階中央に広い板の間の居間。



② 1962年の状態、西に和室、居間を拡張、便所を浴室から分離、台所とユーティリティを改造。

図18 モダンリビング〔事例I〕1950年
東京都豊島区 若い建築家の設計による木造持家

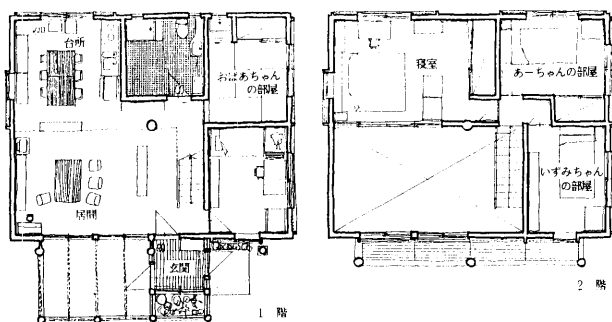


図19 モダンリビング〔事例J〕1966年
船橋市 建築家の自邸の木造持家 51坪

られたが、入浴慣習も設備も異なるため著しく使いにくく、住み手の不平の基となった。この家のその後の増改築の過程が体験記述により明らかにされているが、より日本的なものへの融合が見られる〔図18②〕。

モダンリビングの、よりこなれた事例として〔図19〕（事例J）がある。1966年の建設である。吹抜けのある洋風の居間が中心となり、その傍らと2階に個室がある。そのいずれもが居間の空間にほとんど直接に接している。「個室にいるかぎりは、視線や音などについてのプライバシーはかなり保持できますが、個室の扉から出た瞬間から、その人は居間の空間に参加していることになります。その意味では、この家の空間構成は非常に単純明快であり合理的であると言えますし、見方を変えれば全く襲とか陰影のない、偏平な空間構成だと言うこともできましょう。」と、その体験記述では述べられている。北陸出身のこの記述者の世界とは違うスタイルであり、玄関の構成一つにしても何となく違和感をもちながら、それなりに生活はそれに適応していつている。

モダンリビングが全てこうであったかどうかは分から

ないが、この例はその典型であるということが出来よう。大戦後の日本社会を襲った急激な洋風化傾向は衣食住の全般を覆った。そして日本では、洋風化、即、近代化と考えられていたのであった。

10. 増改築・成長変化に見る変容の波

公共住宅にせよモダンリビングにせよ建築界では誰一人知らぬ者はない存在であるが、一般の人には必ずしも親しいものではない。それならば、ごく普通の住宅はどのような影響を受けどんな形のものが建てられ、そしてどのように住まわれていたか。しかしこれを明らかにすることは意外にむづかしい。特異なものは何らかの形で記録や資料に残るが、普通一般のものは残りにくいのである。

体験記述の中からそれに近いものを拾い出すことは出来る。ただし、これが一般形とまでは言い切れない。よくある月並みなものとして2例を紹介することにする。一つは独立住宅の増改築、もう一つは次節に示す町の建売住宅である。

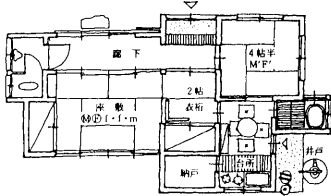
まず独立住宅の一事例。日本の在来木造住宅は増改築が容易である。軸組・和小屋の構法は平面的にいかようにも周囲に延ばし、また内部を改造出来ることが特徴である。そこでの増改築の経緯を追うことにより、時代の波の反映を見ることが出来る。

〔図20〕（事例K）は純粹の都市住宅ではなく、東京市内へは1時間以上の神奈川県藤沢市内に、東京へ通うサラリーマン向けに建てられた借家を買って持家としたもので、1938（昭和13）年頃に建てられ、その後50年間、増改築されつつ住み続けられた。いわば、1戸の家に投影された住居現代史といってよからう。

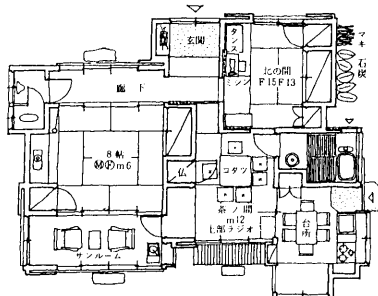
この例で注目したいのは、食事室まわりの変転の過程と、座敷まわりの持続の様相である。

食事の場については、住み始めの頃（1943年）は台所と一体になった板の間にちゃぶ台を置いている〔図20①〕。これは戦前にはよく見られた食事風景で、現代でも公共住宅の2DKのDKではしばしば見られる。1948年頃には台所を増築して整備し、6畳の茶の間を設けここで食事するようになる。一つの安定した形式である。

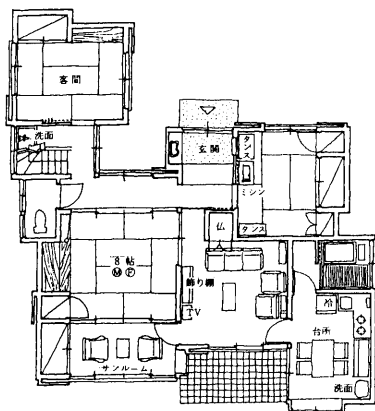
1954年には台所を拡張してDKスタイルに変える〔図20②〕。この改造は注目してよい。一種のモダンなスタイルとしてその後全国を席卷するまでも普及したDKが、一般住宅の改築の場に現れた1事例であるが、これは日本全体から見ればかなり早い時期というべきで、住宅公団の設置よりもさらに1年前の時点である。折りたたみ式のテーブル、造りつけの流し・米びつ・ガスレンジ、出窓、さらにはダストシュートなど、新しい設備や仕上げが導入され、「子供心にも優越感をもった」と体験



① 1943年 座敷は北向き、台所で食事、流しは一段下ったスノコ敷。



② 1954年 座敷を8畳に広げ、南に広縁、6畳の茶の間を設け、台所はDKに改造（ただし食事は茶の間）



③ 1976年 茶の間を洋風居間に改造、DKを拡張整備して食事が漸くここに定着する、2階建の離れを増築。

図20 在来型住宅の成長変化（事例K）1938年頃
藤沢市 当初約13坪 その後7回の増改築あり。

記述されている。その上さらに面白いことには、このDKでの食事もしして長くは続かず、間もなくまた、もとの茶の間に逆戻りしてしまう。DKが狭すぎたのか、あるいは慣習の力の強さであろうか。

そして再びDKになったのは、大分後の1976年である〔図20③〕。このときはDKをさらにひとまわり拡張して充実したのに加えて、この家の主婦が昔からひそかに抱いていた希望をとり入れ、茶の間を8畳大の洋間としソファセットを置いている。茶の間の喪失がDKの定着を助けたとも言えようが、これは日本全体の住様式の流れから見ればかなり遅い時期であったとも言えよう。

一方、座敷まわりの変遷も興味深い。この家は道路や周囲との関係からか、当初は6畳の座敷が北向きに作られ、北側に縁側をもち南は腰壁であった〔図20①〕。しかし間もなく1945年頃には南側にも縁側が付けられ、南北

両方に面する形となる。次いで1950年頃には座敷が8畳に広げられると共に床の間が立派になり、南の縁側も拡張されてサンルームとなる〔図20②〕。ここはサーモンピンクのソファ、最新式の電蓄などを入れ、一風変わった空間に仕上げられていたという。

その後、北側への離れの増築やらその取り壊し、2階屋の増築などを経つつも、この座敷と南北の縁側は変わらず存在し続け、祖父母の葬式などにも有効に機能して今日に至っている。様式の持続は、型として定着したもの強さを示すものであろう。

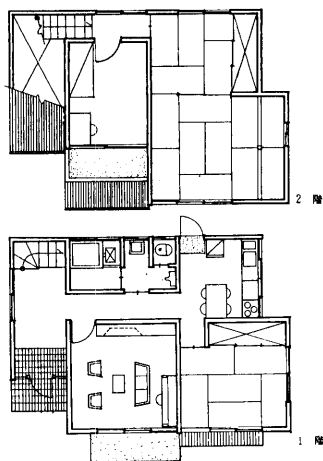
11. 町の建売住宅に見る時代の流行

今日でこそ住宅産業に大手資本が参入して幅をきかせているが、1960年代あたりまでは、住宅といえば町の零細な工務店か大工の仕事だった。ここには優秀な設計者も最新の理論をもった建築家も存在せず、しきたりに従って建てられるのが常である。しかし同時に、その時代の流行には敏感な筈である。とくに建売住宅となれば、買い手の好みに迎合するのは当然であろう。そこには、生の時代の波の影響をうかがうことが出来る。

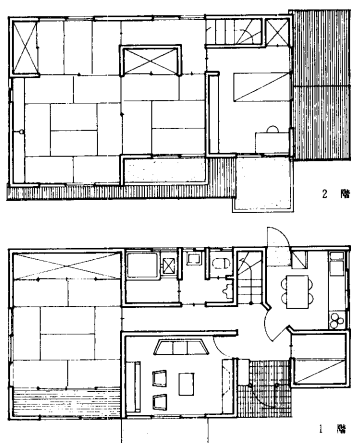
〔図21①、②〕（事例L①、L②）は1961、62年、東京杉並に同じ建設業者の手になるもので、前者①が敷地の崖崩れによって建物も一部壊れたため後者②に移り住んだというから、造成工事もずさんな中小業者によるものであろう。それだけ、この例は当時の一般の空気を反映するものと見てよい。

①の住宅では、食事はDKだったり和室（6畳）だったりしたという。和室はまた夫婦の寝る部屋でもあった。一方、洋間は全く切り離された部屋で応接間風にしつづえられ、日常的にはほとんど利用されないが、暖炉まがいの飾りがありその上には絵がかけられ、「立派な部屋」という印象だった。2階は子供たちの部屋となるが、1階との余りにも強い隔離が気になったという。2階にはまた8畳・4畳半の続き間座敷があり、日常は子供の私室であるが、正月の接待はここで行われたとの記述がある。子供心にも年賀の客に対して親父がここにでんと座っているのが良く、今日のDKではそうは行かないと、記述者は懐かしんでいるのである。

②の住宅はさらに興味がある。この台所はDKとしてはやや狭いので食事には使われてない。家の中央の洋間で日常の食事でもだんらんも行われる。暖炉やピアノのある応接間で、ソファに腰を下ろし背をかかめながら食事する風景はいかにも不自然だが、このプランではここを使うより仕方あるまい。思うに生活の形の想定などなしに、ただ勝手に部屋をつなぎ合わせただけのプランであろう。そしてさらに面白いことには、体験記述したこの本人もこの洋間での食事を格別に奇妙なものとは思わず



L① 1961年 東京都杉並区 28坪. 1階に洋風居間・和室・台所／2階に続き間座敷(8・4.5)・独立個室.



L② 1962年 同 30.5坪. 部屋の種類はL①とほぼ同様だが配列は異なる. 平面構成の原則が見られない.

図21 町の工務店の建売住宅〔事例L①, L②〕

に、これに順応してしまっているのである。

このように当時の建売住宅は、個別に分断された流行や好みの寄せ集めといった風が見られる。すなわち、①DK, ②洋風リビングルーム, ③独立性のある2階の個室, さらに、④洋室前のテラスと芝生, といったものであろう。そして一方に、⑤続き間座敷, という昔ながらの日本住宅の慣習も根強く持続している。生活の実態もその両者が同時に存続しているのである。

両者が結合しながら融合せず、しかも全体的な統一もなく奇妙なプランとして横行している。これが次第に洗練されて現代住宅の典型が出来上がるのであろうか。

12. 現代住居——分譲集合住宅（マンション）

町の工務店はばらばらに分断されたイメージを追ったかもしれないが、それを巧みにつなぎ合わせ統一体としての現代住宅を作り上げたのは、大手住宅産業ではなかろうか。それは良い意味でも悪い意味でも、流行や好み

の集合という性格をもっている。

現代住宅の中でも、独立住宅とはやや異なる条件の下に置かれたのが分譲集合住宅、いわゆるマンションである。

公団・公社など公共の分譲集合住宅は、おおむね賃貸住宅における蓄積の上に立って、それよりやや広い住戸規模のものが作られていった。一方、民間におけるものは、初期の1960, 70年代においては公共住宅に倣いながらも、敷地条件、密度条件の厳しさから、住戸の間口を狭めた独特のプランを形成して行った。ただしその生活様式は、独立住宅とほぼ同様な方向に向いていたと思われる。また1970年代後半からは、いわゆるタウンハウスなど接地型のものも増加している。それらの典型例を、体験記述の中から拾って紹介しよう。

〔図22〕（事例M）は日本住宅公団の3DK（49m²）で、1960年代の建設、分譲とはいえ賃貸住宅のプランの系列を受け継ぐものであり、団地住宅として密度にも余裕のある時代の産物である。49m²の中に3室とDKを収め、DKと1室を連続させ、さらに北側の1室をもつなげ、他の1室は隔離している。体験記述では「なんとなく住み方が規定されてしまっているような気がしてきて、その点が漠然とではありますが不満に思っていたような気がします。しかし、この程度の住戸規模からすればこれも致し方ないことなのかも知れません」と、控えめに述べられている。いわば理詰めのプランの結果と言えよう。

ただし、3-DKとはいえ住み方の上では2-LDKとして使うのが一般であり、その場合寝室となる2室の広さに適合しうるのはよいが、これが不適合の場合、とく

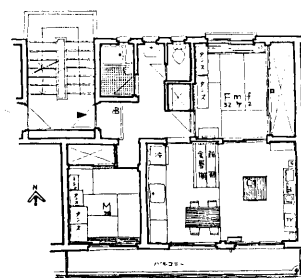


図22 公団分譲集合住宅 3-DK〔事例M〕1960年代 船橋市行田 5階建 49m²

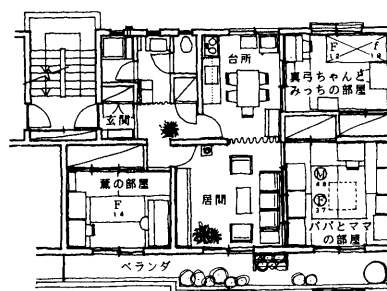


図23 公団分譲集合住宅 3-L-DK〔事例N〕1969年 町田市鶴川 5階建

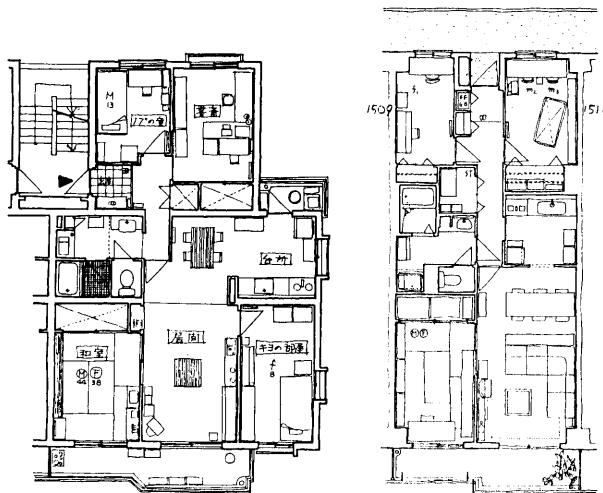


図24 公団分譲集合住宅
4-L-DK [事例O]
1981年
習志野市香澄
5階建 94m²

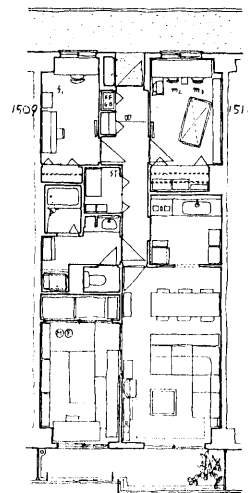


図25 民間分譲集合住宅
3-LD-K [事例P]
1981年
東京都品川区
15階建 77m²

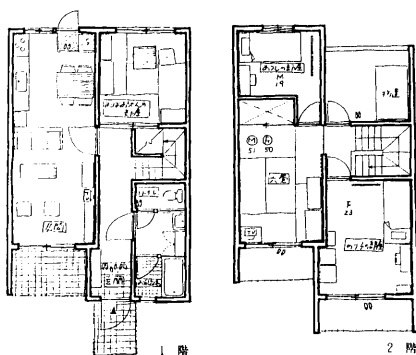


図26 東京都住宅公社分譲集合住宅 4-LDK [事例Q]
1976年 八王子市
テラスハウス 113戸の団地 92m²

に就寝する人数に対し4畳半の狭さが障害になるときなどに、さまざまな住み方のバリエーションが発生することが調査により報告されている。2-LDKとして使うには公私のバランスが公に偏っているためであろう。

〔図23〕(事例N)は3-L-DKとして計画された公団の分譲住宅で1969年の建設、子供(小学生)が独立性のある部屋を占め、夫婦はLにつながる部屋で就寝するという、典型的な住み方である。

〔図24〕(事例O)は同じく公団住宅で1981年の建設だが、規模は94m²と大きい。4-L-DKすなわち四つの個室とひとつつながりのL、DKをもつ。体験記述では、主人が大学教員であるため書斎として1室を専有し、2人の子供(男女)に1室ずつを与えて、これも夫婦はLに続く和室を寝室としている。もし書斎を必要としない世帯なら、南6畳を居間の延長として使う住み方もあろう。しかしいずれにしても、住み方を想定して計画され、それに規定されつつ住むということにはなろう。

なおこの場合、間口の制約から居間が動線の中心とな

り、居間中心型のプラン構成になる場合が多い。これが独立住宅とは最も異なる点で、集合住宅の特徴である。

〔図25〕(事例P)は民間の高層分譲住集合住宅の例で、さらに間口が狭められた3-LD-Kであるが、ここでも二つの個室が子供の部屋、居間に続く和室が夫婦寝室となり、LDが洋間としてしつらえられる。いわば設計の想定なりに生活が規定されるという結果になる。

〔図26〕(事例Q)は公共によるタウンハウス団地の例で1976年の建設、間口の制約と構造壁の規制によりやや窮屈なプランだが、1階にL-DKと和室、2階に個室群という構成は、一般の戸建住宅と全く同様である。

洋間でのだんらん・食事、和室の夫婦寝室、個室化された子供室というパターンは、もちろん需要者の好みの反映には違いないが、まず公共の手によって分析されて定式化され、さらに民間大手住宅産業の手によって隅々まで親切に迎合的に作り上げられパターン化された住居イメージであるように見受けられる。

13. 現代住居——戸建住宅、およびその意味

現代住居の典型としての戸建住宅については、冒頭の3節において示し、その特徴について述べた。この種のプランは注文住宅・分譲住宅を問わず甚だ多いが、たまたま体験記述に登場した同種プランを並べてみよう〔図27～32〕。

これらは建設の経緯も場所も異なりながら、驚くほどの共通点を備えている。確かに現代都市住居の一つの型を形成していると見てよかろう。この型の形成に至るまでの軌跡は既に述べたところであるが、もう一度振り返って、3節に述べたこの型の諸特徴の意味と由来について考察してみることにする。

(1) 子供室の確保と公私空間分化について

私室の独立は、戦後の住宅計画の一貫して辿った道筋であった。まず公共住宅では、狭い住戸の中に強引に壁を設けてまで1室を隔離しようとし〔図14〕、それはやがて定着した〔図17①〕。西欧を模倣したモダンリビングでは、私室と居間という図式的構成を追い〔図18, 19〕、これが若い建築家や建築学生のいわば観念として定着した。一方、社会情勢としての都市の高密化の結果、住宅は2階建が一般化した。戦前には2階といえば格の高い客間がしつらえられたもので〔図4, 5〕、その名残は1960年代にもなお建売住宅などに見られたが〔図21〕、やがてこれは独立性ある個室とされるようになった〔図27〕。高度成長期を通じての家庭生活水準の向上と住戸規模の上昇がこの個室保有を可能にしたし、一方、受験戦争の激化は子供を勉強室に追いやることを当然のことと考えるようになった。また家族規模の縮小、子供人数の

減少が、子供一人一人に個室を与えることを可能にしたとも言える。こうして2階が個室に分割されそれが家族の各人に割りふられるのが、現代住宅の常識とされるようになったのである〔図27～32〕。この個室は誰々の部屋という固有名詞が付けられる。体験記述のほとんど全例がその状況にあり、さらには結婚して家を出た者の部屋すらも、そのまま残される例があることが紹介されている。

ただ、一方で夫婦寝室の確保が必ずしもそれに伴っていないことは注目してよい。狭小な公共住宅では、2DKあるいは3DK住宅において、初めの計画では夫婦寝室として考えられた独立室も、現実の住み方では子供室確保が優先して、夫婦はDKに連なる部屋に就寝し、しかもそれはしばしば襖が取り外されてオープンになる〔図17〕。戸建住宅でも子供には例外なく2階の個室があてがわれるが、夫婦寝室としては居間に連なる和室が使われる例が少なくなく、この部屋は同時に客間としてあるいは居間の延長としても使用される〔図28, 29, 30〕。これは分譲集合住宅においても同様である〔図23, 24, 25〕。

これを見ると、私室の確保あるいは公私空間の分化は、観念の上では成立しプランの構成に実現はされたが、実は子供室のみの独立隔離であったことが分かる。これはおそらく、現代日本社会の住生活におけるかなり大きな問題であろう。

体験記述の中では、2階の空間が1階のLDKなどと余りにも確然と切れていることに対する疑問が呈されていた例〔図21〕、以前の住居の慣習から個室とはいえドアは開放され開けひろげた生活態度をとる例〔図28〕など、急激な閉鎖化傾向に対する戸惑いの気持ちが紹介されている。

そして一方夫婦寝室はと言うと、独立性ある1室をもつという慣習が乏しい。2階にそれが予定されていると見られるプランでも1階の居間に続く和室が充てられる例〔図30〕、2階に夫婦寝室があっても主人は着替えを1階の和室と居間とを行ったり来たりしながらする例〔図27〕など、枚挙にいとまない。

思うにこれは、日本の住生活では、家の中全体がプライベート空間という観念に支配されているのであろう。戦前の住居では、家の中にも接客のための格式ある空間としてオモテすなわち座敷空間があったが、戦後期にこれが失われて以来、全てがウチ空間になってしまったと解釈出来る。その中から子供室の空間のみが析出されたのであり、これは決して公私空間分化の構成をとったのではないと考えられる。

(2) DK あるいはイスザの食事の普及

DK が日本全国に普及したその浸透の速さは、まことに驚くべきものがある。

DK の出発は、公営住宅 51C 型の提案から、すなわち 1951 年からであるとされる。確かに事実ではあろう。しかしその後の急速な普及状況を見ると、必ずしもこれは公営住宅の影響とは考えられない。公営住宅が一般住宅にまで、とくに農村住居にまでも直接の影響をもったとは到底考えられないからである。

思うに当時は既に、一般に DK 形式に向かうだけの下地が十分醸成されていたのではなかろうか。それは一つには、戦後における著しい住居の狭小化、その結果として食事を畳の部屋の外へ追い出そうとする機能的要求があった。そして公団住宅における DK の採用は、ホワイトカラー層における DK 愛好に拍車をかけた。建築家によるモダンリビングもその一端を担った。

しかし必ずしも食事がイスザで行われたわけではない。公営層、とくに低家賃公営住宅（第2種公営）では、DK を使いながら板の間にちゃぶ台でユカザ形式が多いことが、多くの調査で報告されている〔図17①〕。DK につながる畳の部屋が使われることも少なくない。

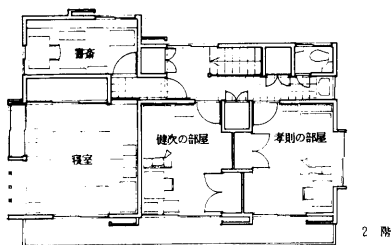
板の間で、床に座って食事をする、という形式は、戦前からの生活様式としてもかなり一般的であった。伝統的農家のダイドコロでの食事は板の間であったし、戦後期の極小住宅でもこの形をとるものは多かった。体験記述の中にも、1940、50年代では台所でのユカザの食事が行われている例がある〔図20〕。つまり、台所で座って食事するのは、特別に新しい生活様式ではなかったのである。

さらに1960年代あたりからの電気ごたつの普及がこれを支援した。電気ごたつはおそらくテレビ以上に、日本の住様式・住文化の形成に大きな力をもったものと思われる。

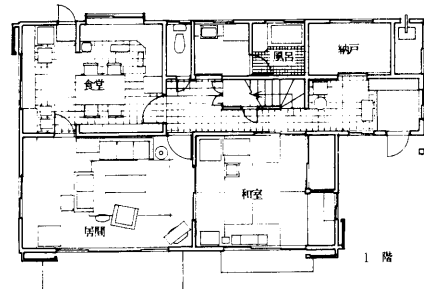
こう考えれば、51C 型が有ろうが無かろうが、日本の住宅は早晚 DK 形式になって行ったに違いない。それを早めに踏み切って普及に契機を与えたのが 51C 型であったと考えることが出来る。

ただしその後、食事にイスザが普及して行ったのは、むしろマスメディアを通しての流行としてであろう。まず戦後のアメリカ映画やブロンディの漫画などが気楽な台所や食堂を紹介した。公団住宅の居住者層は DK スタイルの先頭を切って走ったが、さらにはいわゆるモダンリビング、後には現代風の建売住宅などがこれを推進した。60年代からのテレビドラマなども積極的にこのスタイルのモデルになった。ハード面ではステンレス流しの果たした役割は大きい。

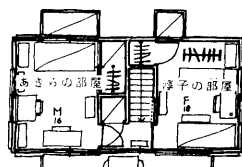
これらの影響があったにせよ、イスザの食事の推進のいちばんの引き金になったのは、あるいは、戦後における家族関係の変化であったかもしれない。まず主婦の家事労働の軽減に DK が大きく寄与したであろうことは間違いない。子供や主人が気軽に炊事場に入る雰囲気



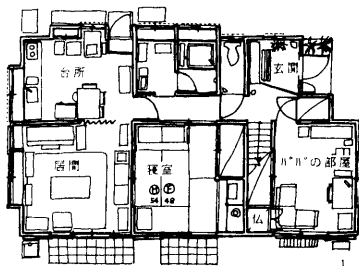
2 階



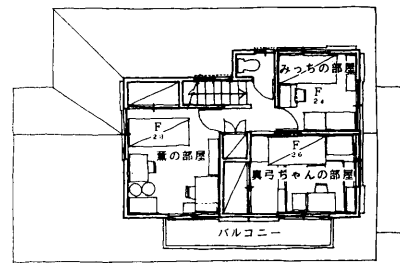
1 階



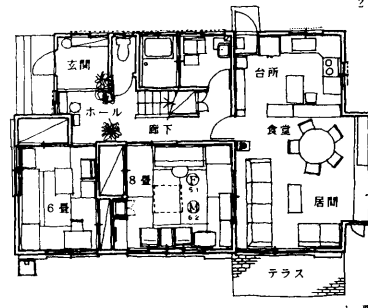
2 階



1 階



2 階



1 階

図27 工務店設計施工の注文住宅〔事例R〕

1975年 川崎市麻生区 (小田急沿線)

150m² 敷地320m²

1階: L・DK・和室

2階: 個室3 (和1洋2)・書斎

図28 大工施工の注文住宅〔事例S〕

1974年 千葉県印旛郡本埜村

92m² 敷地373m²

1階: L・DK・和室2 /

2階: 個室2 (和1洋1)

図29 大手不動産業の建売住宅〔事例T〕

1974年 町田市

118m² 敷地232m²

1階: LD・和室2

2階: 個室3 (和1洋2)

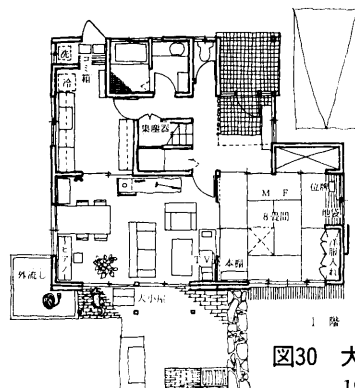
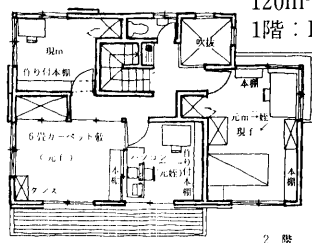


図30 大手住宅産業の建売住宅〔事例U〕

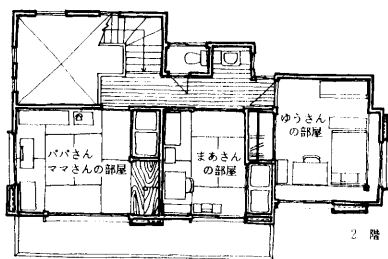
1982年



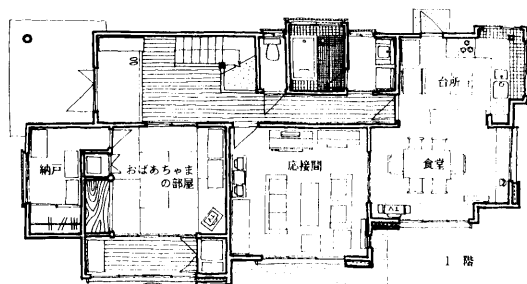
浦和市 木造戸建250戸の団地

120m² 敷地200m²

1階: LD・和室 / 2階: 個室4 (和1洋3)



2 階

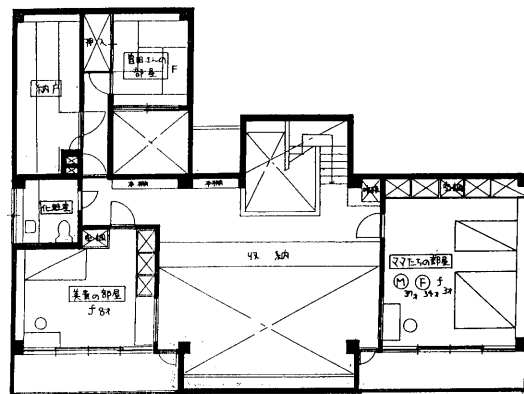


1 階

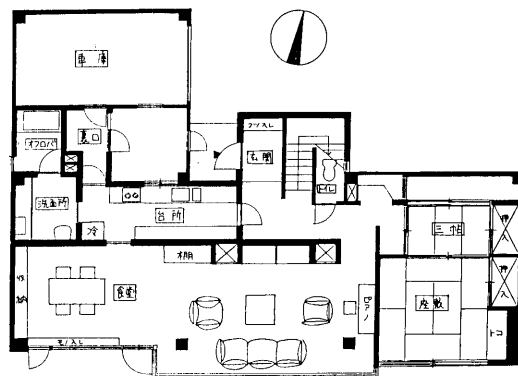
図31 若い女性二級建築士設計の注文住宅〔事例V〕

1982年 松戸市 150m² 敷地427m²

1階: L・D・和室 / 2階: 個室3 (和2洋1)



2 階



1 階

図32 若い建築家設計の注文住宅〔事例W〕

1972年 東京都中野区 RC造 215m² 敷地約350m²

1階: L・D・和室 / 2階: 個室3 (洋2和1)・納戸

も作った。また、以前の茶の間におけるユカザの食事は、席の序列というものがあったが、台所の中で食べるようになってそれが崩れる。戦後期の民主化の風潮がそれを推進したし、また零細アパートなどに見られる慣習の破壊がさらにこれを助長した。高度成長期における労働時間の延長、主人の帰宅時刻の不定、都市の膨張に應ずる通勤時間の延長、受験戦争による子供の塾通いなどが、一家揃っての食事慣習を崩壊させ、そして食事生活をだらしなくしたとされる。

DK あるいはイスザ食事が、住空間の機能的構成や気楽な雰囲気形成に力をもったことは確かであろうが、同時に、食事まつわる行儀や礼儀作法や格式性の崩壊に役立ったことも否定出来ない。

(3) 洋風居間の意味

洋風の居間——リビングルーム——は、現代住宅では今やどの家庭にも見られるものになったが、この形成は、設計計画の面から導入推進されたと同時に、一般大衆の普通の生活の中で自然に形成されたという点が、住居現代史としてまことに面白い。

計画面では何ととっても戦後小住宅におけるモダンリビングであろう。これは建築家によって広められたが、モデルとするのは西欧の住宅のイメージであった。ただし当時の建築家として深い意味でヨーロッパやアメリカの生活を知っていたわけではあるまい。戦後のあこがれとしての西洋であり、しかも自分なりに勝手に解釈して作上げた西欧のイメージであったと思われる。

一方、一般大衆の中で形成された洋風居間も、また興味深い。1950年代の後半からの急激な所得水準の上昇、住居水準の向上につれて、家具の量が急増する。たんすや洋服だんすなど以前からあった家具も増えたが、同時に、ソファや飾り棚やピアノなどの新しいリビング系家具もどっと家庭に入り込んだことが報告されている。そしてこれらの家具が、自然に居間を形成した。公団住宅の2DKや3DKですら、DKと畳の1室をつなげてここにソファやピアノがしつらえられる。この傾向が次第にリビングルームを形作るに至ったのである。

しかしこれは奇妙な居間であった。まず申し合わせたように応接3点セット（長ソファと安楽椅子とティーテーブル）が持ち込まれる〔図27～32〕。これらはおおむねセットで購入され、そして会社の応接室然と並べられる。ソファはこう置くもの、居間はこうしつらえるものという固定的な観念が支配しているかの感がある。そしてこれは、建築家の間にすら定着しているように見える。

思うにこれも無理ない。人々は、その住宅で初めて洋風の居間なるものをもったのである。伝統や慣習もなければ、親や祖父から受け継いだ安楽椅子などもない。新たに買い求めてしつらえざるを得ない。そこで家具のみ

が優先して居間のイメージが作られる。

こうして形作られた応接風の居間は、家中でいちばん上等の部屋として意識される。従って接客の場となる。しかし家族のくだけただんらんと改まった応接を一つの場でとり行おうとするものの矛盾は明らかである。このため、折角作った洋風居間が完全に応接間となってしまう例や、逆にとりちらかした居間となって来客時にあわてるといった風景がどこでも見られることになる。家族のくつろぎと来客の応対とをいかに分離し、いかにとり合わせるか、その空間構成は今日の住居計画の重要課題であり、以前我々が提案した「デュアルリビング」の考え方はその一つの解決案である。

DKと同様、この居間でもイスザの生活のみが行われるわけではない。西欧との決定的な違いは履物であろう。日本では家の中では靴を脱ぐということから、居間もウチすなわちプライベート空間といった雰囲気になる。欧米でも時にじゅうたんの上に腰を下ろす行為が見られるが、靴を履かない日本の生活ではむしろこれは日常的である。体験記述の中には、ソファ類を持ち込まずカーペットに坐ることを前提とした住み方〔図24〕（事例O）などもある。

こたつの普及とカーペットの普及も、ユカザへの傾斜に力を貸している。そしてソファが背もたれの役になっている例も少なくない。居間での生活様式はまだ安定せずゆれ動いている。

洋風居間は、日本にとっては伝統のない新しい空間である。これを逆手にとって、日本的な新しい生活様式を意識的に作り上げていくことも出来よう。

(4) 和室の持続の意味

食事やだんらの場の洋風化傾向、子供室のベッド化傾向の進行にも拘わらず、依然として和室を少なくもひと部屋は設けるという慣習は強固に維持されている。そしてその位置は、もちろん例外もあるが、おおむね、①玄関に近い位置、②居間の隣 となっている。

畳の部屋の持続は、まず単純には伝統的住様式の維持と考えられる。しかし戦後初期を考えると必ずしもそうでない面も多い。窮乏の時代には、狭小な面積の中でいかに合理的に住むかだけに懸命であり、伝統や慣習は無視された。とくに零細アパートではそれが著しかった。ただこの狭小の中で密度高く住むためには、畳が便利ではあった。公共住宅ではその意味から居室に畳が敷かれたが、これはもはや伝統とはかけ離れて単なる床仕上げであった。

生活意識の風潮としては、接客とか格式とかはことさら排除された。しかしそれにも拘わらず畳は住様式の中心として維持された。確かに子供の部屋などは近年は洋間が多いが、夫婦寝室として予定される部屋は依然とし

て和室がほとんどであるし、それも床の間付きの整った和室として作られる。地方では続き間座敷が新築住宅においても幅をきかせている。座敷はしぶとく維持されて来た。否、むしろさらに復活されて来ている。

これを日本人の住意識の中に存する幼時からの心理的な「刷り込み」と見るのか、あるいはもう少し具体的に何か機能的な意味を伴ったものと見るべきか。

これについては、農村あるいは地方都市における地域生活との関連で見る見方もある。ここでは、婚礼や葬儀の際の儀礼が、多く社会的施設に頼るようになったとはいえ、なお住居のもつ役割は大きいし、あるいは講や正月の集まりなどに集落を単位とした回り宿制の供宴のしきたりもある。農産物流通の近代化の結果、農協の下部組織としての集落の結束の強化と共に、近隣集団の結合の具体的な場として、続き間座敷が必要とされるのである。農村住宅における座敷の強化に引きづられて地方都市でも復活される。それが間接的に大都市における復活にもつながっているのではなかろうか。

ただし大都市での復活は、主として接客空間としての意味が強いと思われる。洋間のリビングルームが家族日常生活と接客の混在から格式性を失った今日、改まった客の応接の空間として再び座敷が登場したと考えてよからう。その証拠に昔の洋風応接間と同じく必ず玄関に近い位置に設けられるのである。

またこれは、各家庭での日常生活においても、やや改まった行為などに用いられると同時に、昔畳に育った年配層の生活の場——例えば着替えやくつろぎ——としてもなお機能している。若年層からは次第に遠ざかりつつあると思われる。

(5) 異なる性格の場の併存と使い分け

さて、洋風居間の普及と、和室、座敷、さらには続き間の復活・隆盛とを、いかに関係づけて見るべきか。これを矛盾した傾向と見るか、日本人のもつ当然の性格と見るか、これが実は最も分かりにくい現象である。

日本人の食生活は、和洋中華その他何でも日常の中に持ち込む。衣生活では洋服も着れば和服も身につける。言葉も平気で外来語をとり入れる。こういった日本人の性格が、やや通俗的な見方かもしれないが、和室と同列に洋風の部屋をとり入れることになったのではあるまいか。これを異質なものと矛盾とか感ずる思考が欠如していると見てよい。

日本の伝統的な住み方では、畳の部屋の連続を、家族構成の変化やその時その時の都合に従って、部屋の用途を変えて自在に住みこなして来た。食事のための茶の間のみは定まっていたが、その他の部屋の使い方やしつらは季節によりまた家族の成長により変化した。

ところが日本住宅の近代化につれて、次第に部屋の用

途や使う人が固定化されて来る。とくに2階の個室は完全に個人分割される。一方、1階におけるL・D・Kおよび和室は、使用者が固定しないのみか、行為との一対一対応も希薄であるように見受けられる。もちろん食事にはDKが使われるとしても、夜や休日にはLで、あるいは和室でとか、季節に応じてなどと、変化する。家族のくつろぎやだんらんや接客も、DK・L・和室を時と場合により適宜しつらえて使うという住み方が、むしろ一般的であるように思われる。

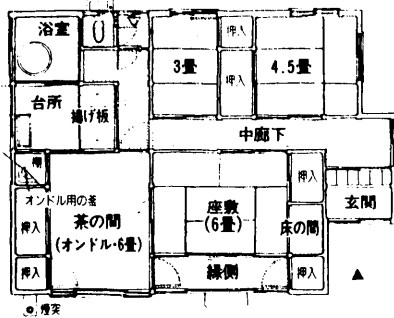
これが続き間型以来の、畳のひろがりに場の意味づけを与えて自在に使う住み方の名残だとまでは言い切れないが、異なる性格のものを適宜融通して使いこなすという意味では、ある種の日本的住様式の持続と見なすことも出来よう。家庭生活の中心である1階の部分には、その生活の形態がなお続いているものと思われる。

(6) 混在併存を可能にする中廊下

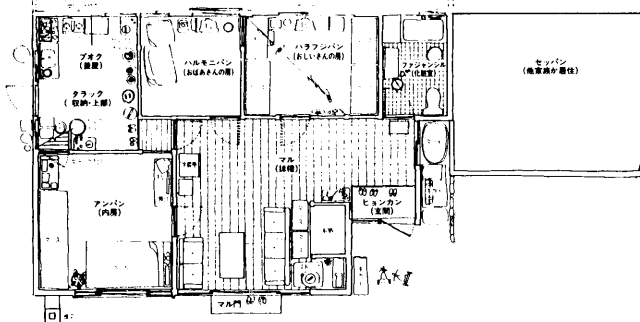
このような和洋の住様式の混在併存を積極的に推進するモメントについてはなお明確でないが、それを可能にする仕掛けは、平面構成の中に発見出来そうである。それは、中廊下である。

中廊下は1920年代前後に一般都市住宅に発生したと見られ、それはオモテとウチをはっきりと分離し各室の独立性を確保する装置として、すなわち住様式の近代化の路線に乗るものとして機能したと解釈される。この性格は以後ずっと引き継がれる。住居狭小化の1940、50年代には廊下を設けるゆとりもなく一時忘れられ、あるいは意識的に退けられて茶の間中心の構成が出現し、モダンリビングでは居間中心型的なプランがもてはやされた時期もあったし、さらに住戸間口の狭小化を余儀なくされる集合住宅ではやはり居間をホールとするプランも多いが、多少とも規模と配置に余裕が生ずれば直ちに廊下は復活する。洋間と座敷という異質なものが併存しながら、これを別々に使うことを可能にするのが中廊下なのである。そして両者を独立に使用するという保証が、両者を安直につなげることをも促したのではあるまいか。動線的には各々独立しながら部屋相互は開放的に接しているのは、奇妙でもあるし不思議でもある。中廊下の存在も、現代日本住居を支える重要な1特徴である。

これに関連して興味深いのは、富井正憲氏らによる朝鮮住宅営団の住宅のその後の変化の調査である。大戦末期にソウルに建設された同住宅は、中廊下型の和風住宅の構成を基本としていた〔図33①〕。韓国独立後、これらは韓国人によって住まれ、改造を経つつ今日に及んでいるが、おおむね中廊下をつぶして部屋と一体とし、マル（抹棲＝板敷の広間）になっている〔図33②〕。韓国人にとっては、薄暗い中廊下の意味が不可解であるらしい。一方、日本では現代の新築住宅にまで延々と中廊下の空



① 1942年建設の標準設計〔甲型二号〕



② 1988年現在の状態

図33 朝鮮住宅営団の住宅のその後（富井正憲氏調査）

間が受け継がれているのを見ると、これはやはり日本住文化の特質であるように思われるのである。

ただここで興味深いのは、この中廊下なるものが日本住居でも意外に歴史の浅いものだという点である。1920年代前後に発生したものだとすれば、まだ1世紀に満たない。しかしこの近代化の過程の中で生まれた住居形式は、今や日本人にとって欠くべからざるものとなり、そしてこれが混在の住様式を支えるものとして定着したと解釈してよからう。

14. 文化の力と計画の役割

過去半世紀の間の日本の都市住居の変容の軌跡を辿ったが、本論はここまでである。ただ、初めの課題に戻って、「住宅計画の立場から」という注釈に沿って私見を述べなければならぬ。それはとりも直さず、今後の住居計画をどのような方向に導いて行くべきか、その計画的方針について示唆せよということであろう。それに応えて一言述べるが、これはあくまで付録である。

この50年間、計画の力が住文化の上で何をなし得たか、集合の問題は一応別として1戸の住居の住様式についてのみ言えば、例えば、小住居におけるDKの提案、食寝空間の合理化、洋風リビングルームの提案、居室の独立性のための部屋の分化、台所および水まわりの合理化、数えあげればこういったところであろうか。そしてこれらの多くは機能的合理性の追求であった。

一方、計画の力とは無関係にも、住居は変容を続けて来た。それは社会状況の変化によってもたらされたものである。しかし実は、社会状況に基づく変化と計画的行為による変化とは、はっきり区別がつかない。例えば洋風リビングルームの形成などは、確かに建築家によるモダンリビングの提案があったにせよ、むしろ社会風潮一般の動向の結果と見るのが至当であろうし、居室の独立性のための間仕切りと同様である。さらにはDKにしても、仮に51C型が無かったとしても、日本社会の住文化の流れを概観すれば、早晚そのようになって行ったであろうことは推察できる。

一方、近年における続き間の復活・隆盛などの傾向は、計画とは関係ないところにおける動きである。これはむしろ住文化の底流といってよからう。

こう考えると、計画とは何かということを再度問題にしなければならぬ。おそらく、文化の流れの大きな底流に対して、その方向を根本から曲げるほどの大転換を企てることは無理だし無意味だと思われる。むしろ、その時代々々の社会状況によって好ましくない方向に押し流されようとしたとき、流れに操作を加えて、より望ましい方向に引っ張る役目が計画であろう。時には、好ましい流れをより促進させる場合もあろう。いずれにしても、文化の流れに乗りつつ、時代のさまざまな外力に対抗して住様式の舵とり役になることである。どこまでそれが可能かは、計画者の力によるし、またそのための効果的方法の探索の正否にかかっている。

好ましい方向と言うからには、当然の前提として価値判断が入る。時代の流れに対する問題点の指摘があってはじめて、計画の目標も設定できるのである。これまでの多くの計画的行為も全てそうであった。DKの提案は狭小住宅における就寝空間の確保を実現するための試みだったし、部屋の分化と独立性の確保は個人の場の獲得を目指したものであった。

計画の目標設定とは、住文化の底流を踏まえつつ、現代の状況の問題点を指摘し、その流れの方向づけに対して的確な指示を与えることである。

しからば、その目標像とは。これについての私の考えは、過去半世紀の変容を解釈する中で、既に十分表れたことと思うが、最後にあらためてこれを列挙することで、この論文を終わりたい。

① 子供の個室の閉鎖化・分断化に歯止めをかけ、家族統合を促す空間構成を探究すること。

② 洋風居間の住様式上の不安定状況、とくに応接的な家具配置の流行を打破して、家族のくつろぎの空間にふさわしい空間の様式の可能性を提示すること。とくにイスザとユカザの融合の上の新たな生活様式の提示を試みる。

③ 和室と洋室の唐突な接合とぶつかりあいの状況に
対して、新たな空間構成の試みを示すこと。

④ 客を迎え入れる構えとしての座敷の復活・隆盛の
意味を評価して、家庭内日常の問題だけでなく、外に対
して開いた姿勢の住居のあり方を探求すること。

これらが、日本住居現代史を辿って住文化の近代化を
考察した結果から生まれた、私なりの目標像である。

〔付記〕

この論文は、「ハウジングスタディグループ」の共同
研究『「型」の崩壊と生成——体験記述にもとづく
日本住居現代史と住居論——』に多くを負ってい
る。そのメンバーは下記のとおりである。

鈴木成文・小柳津醇一・畑聰一・初見学・在塚
礼子・友田博通・長沢悟・曾根陽子・笠嶋泰・
戸部栄一・小林秀樹・菊地成朋・黒野弘靖

〔協力〕峯成子・高岡えり子・三井健次・長田
裕子・金子友美

また下記の日本女子大学住居学科大学院生の体験記
述による協力を得た。

福島典子・新田陽子・斯波薫・岸順子・村木美
貴・鈴木淳子・屋敷知

記して感謝の意を捧げる。